

【暗証聖句】「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」コリントの信徒への手紙二 3 章 18 節

【日・神のみかたちに】

ローマの信徒への手紙 8 章 29 節 「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多く兄弟の中で長子となられるためです。」

人間は、罪を犯した結果、本来のあるべき姿を失ってしまいました。そこで神様は、私たちがイエス様のお姿に似たものにとしようと決めて下さっていました。それは失われた姿を回復するのみならず、「御子が多く兄弟の中で長子となられるためです」とあります。これは、御子イエス・キリストが私たちの長子、つまり一番上の兄となって下さり、私たちはその弟、妹となるということです。私たちもイエス様と同じく神様の子とされる。これが神様の御計画なのです。そこで、イエス様に似たものとなるために、神様は聖霊を世に使わされました。各時代の希望下巻 P157 に次のように書かれています。

「みたまについて、イエスは、「御霊はわたしに栄光を得させるであろう」と言われた(ヨハネ一六ノ一四)。救い主は父の愛を実際に示すことによって父の栄光をあらわすためにこられた。そのようにみたまも、キリストの恵みを世にあらわすことによってキリストの栄光をあらわすのであった。神のみかたちが人間のうちに再現されるのである。神の栄え、キリストの栄光は、神の民の品性の完成に含まれている。」

このように、私たちがイエス様に似たものに作り変えられていくことは聖霊の働きであり、またイエス様に似たものとなるというのは、愛の品性が実ることであることはもちろんのこと、父なる神様と御子なるイエス様の栄光を世に表すことでもあるのです。神様の救いの計画は、このような形で進んでいくのです。

【月・清めの火の中の信仰】

ヨブ記 23 章 1 節～3 節「ヨブは答えた。今日も、わたしは苦しみ嘆き、呻きのために、わたしの手は重い。どうしたら、その方を見いだせるのか。おられるところに行けるのか。」

ヨブは激しい試練にあい、信仰が試されました。息子たちが立て続けに亡くなり、自分の身にも病気が襲い掛かってきました。その苦しみや悲しみをさらに追い込むように、友人たちがやって来て、「ヨブが、何か悪いことをしていたからではないか」と責めるのでした。ヨブが辛かったのは、このような苦しみの中にも増して、神様が沈黙され、どこにも見出せなくなってしまったことでした。私たちも試練にあうと、試練の苦しみと共に、なぜ神様がこのような苦しみを許されるのか理解できないと苦しむものです。ヨブの試練の背後では、この試練に対してヨブがどのような態度を取るかという、神様とサタンのかげひきがあったのですが、そのことはヨブには全く知らされていませんでした。ヨブにできることは、それでもなお主を信じ続け、耐えることだけでした。しかし、ついに主がヨブの前に現れるときがきます。試練をつぶやくヨブに対して神様が言われたのは、「お前は何も知らない」ということでした。

ヨブ記 38 章 1 節～4 節 「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸を暗くするとは。男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。わたしが大地を据えたときお前はどこにいたのか。知っていたというなら理解していることを言ってみよ・・・。」

神様は、神様が創造されたこの世界のことをどれほど知っているのかと、ヨブに問います。ヨブはまるで知らないこと

に気づかされます。それなのに、さも分かっているかのように神様に不満をぶつけている自分の愚かさに気づかされたのです。私たちに求められていることは、試練の中でも、神様は良いことしかなさらないと信じて忍耐することです。それにより、私たちは精錬された金のような信仰を身に着けていくのです。

【火・イエスの最後の言葉】

十人のおとめのたとえ話で、愚かなおとめの問題は、花婿をお迎えする際に必要な燭台の油を切らしていたことでした。一般的に、油は聖霊を象徴しており、それを切らしているとは、キリストとの関係が築かれていないことを意味しています。だから、主は愚かなおとめに対して、「はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない」(マタイ 25 章 12 節)と言われたのです。それと共に、ガイドの著者によると、聖霊は「品性」を表しているとも考えられると言います。その場合、花婿をお迎えするにふさわしい品性が整えられていないということになります。それは聖霊と同様に、他の人からもらうことのできるものではありませんし、慌てて補充できるものでもありません。油を聖霊と品性の両者としてとらえるなら、聖霊を切らしてしまった結果、キリストのような品性が実らなかったということになるでしょう。

イエス様は、マタイ 25 章 31 節～33 節に、「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く」と言われた後、両者の違いは、小さな者にやさしくしたか、しなかったかでありました。また、その小さな者とはイエス様ご自身のことなのだとおっしゃいました。聖霊により、キリストと一つとなっている人は、自ずと愛の品性が行動となって現れてくるものです。不完全であるかもしれませんが、私たちの小さな愛の実りを、主はいつも見ておられるのです。

【水・目覚めた人々】

ダニエル書 12 章 10 節「多くの者は清められ、白くされ、練られる。逆らう者はなお逆らう。逆らう者はだれも悟らないが、目覚めた人々は悟る。」

イエス様の再臨が近づくと、2 種類の人々に分けられます。清められる者と逆らう者とのことです。清められる者は白くされ、練られるとありますから、試練が伴う中でより一層白く品性が清められ、完成されていくことが分かります。それに対して、逆らうものはなお一層神様に逆らうようになります。また、「逆らう者は神様の時もご計画も、何が正しいことなのか、だれも悟ることができませんが、目覚めた人々はそれらを悟るのです。神様のみ旨を悟ります。終わりの時が近づいていることを悟ります。永遠の命が待っていることを悟ります。「その時まで、苦難が続く。国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう」(ダニエル 12:1)とのみ言葉が実現しているのだと悟り、それが最後の試練にも耐える力となるのです。

【木・品性と共同体】

エフェソ 4 章 12、13 節「こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。」

主が望んでおられるキリストに似たものとなることを、ここでは、「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」と表現されています。注目すべきは、このような成長は、神様の奉仕の業を通して起こることと、キリストの体を造り上げてゆき、教会員が一つとなっていくということです。つまり、一人ぼっちで成長するのではないということです。独りぼっちでは愛を生きることはできません。誰か愛を必要としている人がいるからこそ、愛の品性が完成されていくのです。それが神様の奉仕の業であり、教会全体の働きです。教会は時に人間関係の難しさに悩まされることがあります。しかし、これも許しと寛容さの訓練なのだと考えれば、違った目で見ることができないのでしょうか。